

## 長期入院児のストレスに対する看護師の認識と援助行動

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
臨床心理学領域  
池田 華奈

子どもは入院によって様々なストレスを体験する。さらに入院が長期化すると、ストレスはより複雑なものとなる。小児看護では、治療・検査に伴うストレスを取り除く援助だけではなく、疾患や入院生活に伴うストレスなど、入院によって子どもが体験するストレスを的確に理解し、適切な援助を行うことが重要である。

先行研究では入院児のストレスについて整理されているが、看護師が実際にどのように認識しているのかについては明らかではない。また、看護師は、入院児の発達段階に応じて、様々な援助を行っていることが明らかとなっているが、長期入院児のストレスに対して看護師が実際にどのような援助を行っているのかについては明らかではない。

そこで、本研究では、長期入院児のストレスに対する看護師の認識と援助行動を明らかにすることを目的とした。長期入院児の看護を経験したことのある看護師7名に予備調査を実施後、6名の看護師にインタビュー調査を実施した。主な結果は、以下の通りである。

本研究協力者は、長期入院児のストレスには、《疾患に伴うストレス》《治療・検査に伴うストレス》《入院に伴うストレス》の3つがあり、その内最も発言の多かった《入院に伴うストレス》では、〈日常生活の制限〉〈遊びの制限〉〈学校生活の制限〉〈人との関わりの制限〉の4つがあると認識していた。長期入院児のストレスに対する援助行動では、《自分自身に関わる行動》《他者へ働きかける行動》《環境へ働きかける行動》の3つが示された。入院児に対する援助のしやすさと援助のしにくさについては、《入院児の年齢》と《入院児の特徴》が関連しており、援助しにくい入院児は、〈思春期〉で〈気持ちのわかりにくさ〉という特徴があった。援助しにくい入院児への対応では、《関係構築のための行動》と《情報共有のための行動》があった。本研究協力者が感じている《長期入院児に対する援助の限界》では、〈業務による制約〉〈規則による制約〉〈問題意識の薄さ〉があり、《現状を変えるために望んでいること》として、〈他の専門職による支援〉〈自己研修〉があった。

以上の結果を先行研究の知見と比較しながら考察した結果、本研究協力者は、長期入院児のストレスをある程度適切に認識し、援助していることが明らかとなったが、思春期の入院児のストレスに対する認識と援助が不十分である可能性が示唆された。また、思春期の入院児の気持ちが分りにくいという特徴に対して、援助が難しいと認識していた。さらに、業務や規則による制約、看護師自身の問題意識の薄さがあるため、援助に限界があると認識していた。それらに対して、本研究協力者は、入院児を理解するために様々な努力や工夫をしながらも、看護師だけの援助に限界を感じ、他の専門職による支援や自己研修の機会を求め、知識と技術の向上を望んでいた。

本研究では、これらの結果を踏まえて、長期入院児のストレスに対するより良い援助の方法、またその援助を行っている看護師の支援について検討した。